

第2章 史跡の概要

第1節 立地と環境

(1) 自然的環境

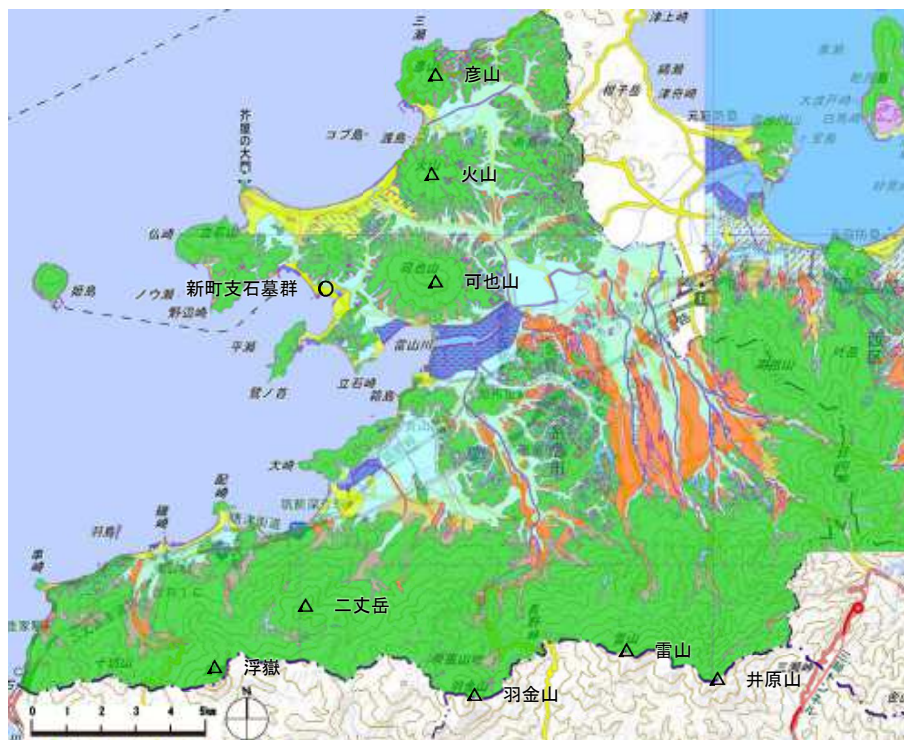
1) 位置、地形

糸島市は、福岡県西部に位置し、東側は福岡市に、南側は佐賀県(佐賀市、唐津市)に接している。市の中央には前原の市街地が位置する台地やその周辺の低地が広がっており、北側は可也山(標高 365.1m)や火山(標高 244.1m)、彦山(標高 231.7m)が位置する。南側が佐賀県との県境となっており、東側から井原山(標高 982.4m)、雷山(標高 954.5m)、羽金山(標高 900.3m)、二丈岳(標高 711.4m)、浮嶽(標高 805.1m)などの山稜が続いている。市の北西側は玄界灘の海域となっており糸島半島の海岸低地には砂州や砂丘が発達しており、糸島半島の野辺崎の西方沖合には姫島がみられる。

指定地は、可也山の西側に位置し、波静かな引津湾沿いに所在する。



図 2-1 糸島市位置図



配色	分類項目
山地斜面等	山地斜面等
崖	崖
地形地	地すべり(滑落崖) 地すべり(移動体)
台地	更新世段丘 完新世段丘
段丘	台地・段丘
山麓堆積地形	山麓堆積地形
扇状地	扇状地
自然堤防	自然堤防
砂州・砂堆・砂丘	砂州・砂堆・砂丘
天井川・天井川沿いの微高地	天井川・天井川沿いの微高地
凹地・浅い谷	凹地・浅い谷
谷底平野・氾濫平野	谷底平野・氾濫平野
海岸平野・三角州	海岸平野・三角州
後背低地	後背低地
旧河道	旧河道
高水敷・低水敷・浜湿地	高水敷・低水敷・浜湿地
河川・水跡線及び水面	河川・水跡線及び水面
旧水部	旧水部
農耕平坦化地	農耕平坦化地
切土地	切土地
高い盛土地	高い盛土地
盛土地・埋立地	盛土地・埋立地
干拓地	干拓地
変更工事中の区域	変更工事中の区域

図 2-2 土地条件図

資料：『数値地図 2500(土地条件)』国土地理院(平成 29 年 3 月 8 日刊行)

第2章 史跡の概要

2) 地質

地形的には糸島半島、脊振山地ともに花崗岩などの深成岩類が広く分布し、深成岩類の苦鉄質片岩などが帯状に分布していて、芥屋の大門や可也山山頂、姫島の上部には後期中新世～鮮新世にかけての火山岩類が分布している。

対象地周辺の地質は主に砂（新期海浜および砂丘砂層）で覆われている。

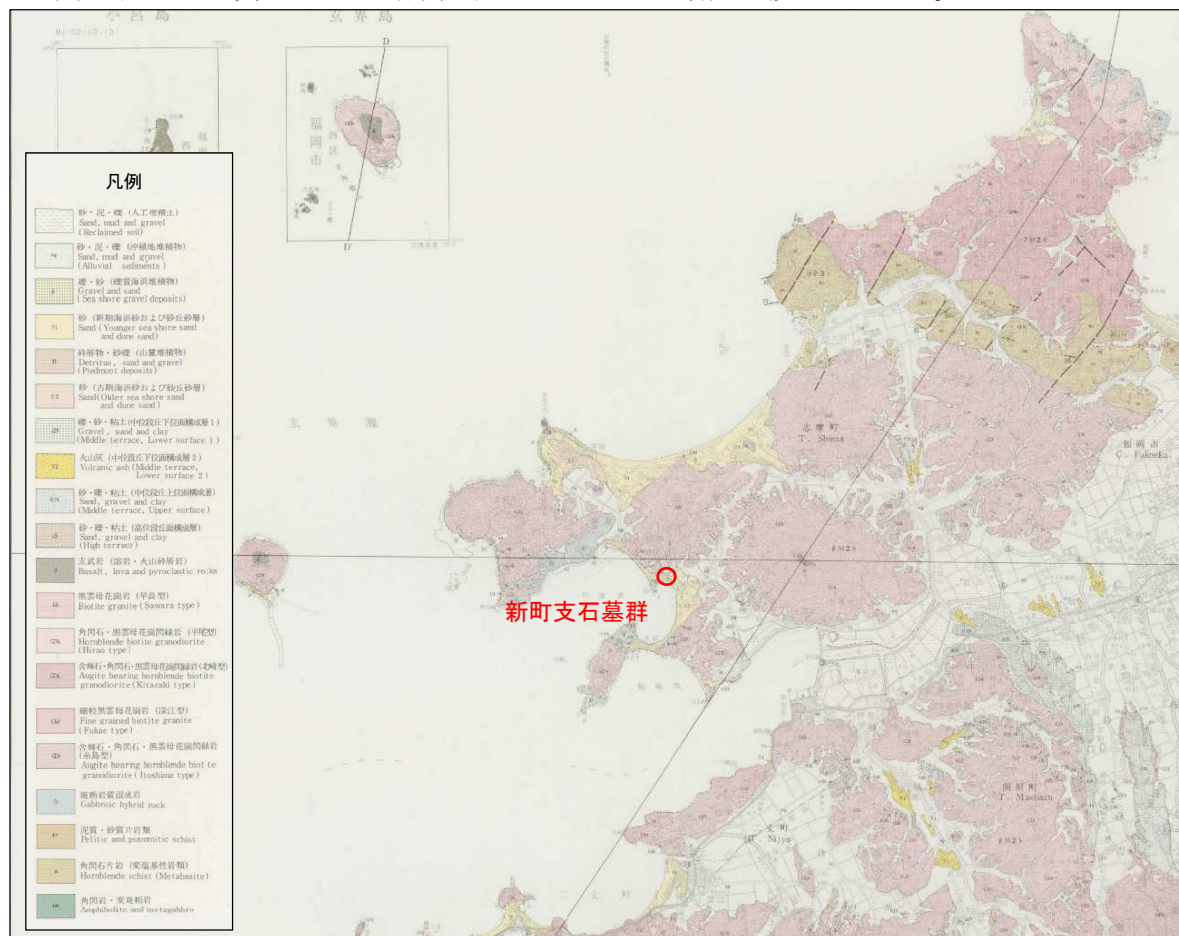


図 2-3 表層地質図

資料：『5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査(前原・玄界島)』国土交通省

3) 水系

市内の主な河川としては、瑞梅寺川、雷山川、長野川、一貴山川、福吉川、桜井川があり、その流域に沖積地が広がっている。

旧怡土郡のエリアは脊振山地から河川が複数形成されているのに対し、指定地のある志摩半島エリアは水系が少ないことがわかる。

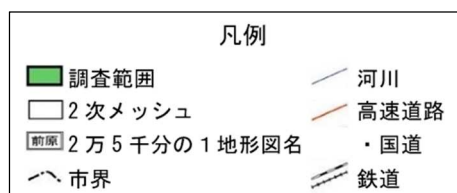


図 2-4 地域概要

資料：『土地条件調査解説書「糸島地区」』国土地理院

4) 気候

本市は日本海型の気候区分に属し、対馬海流の影響を受け比較的温暖な気候である。年平均気温は16～17℃、年間降水量は約1,600mmを観測する。

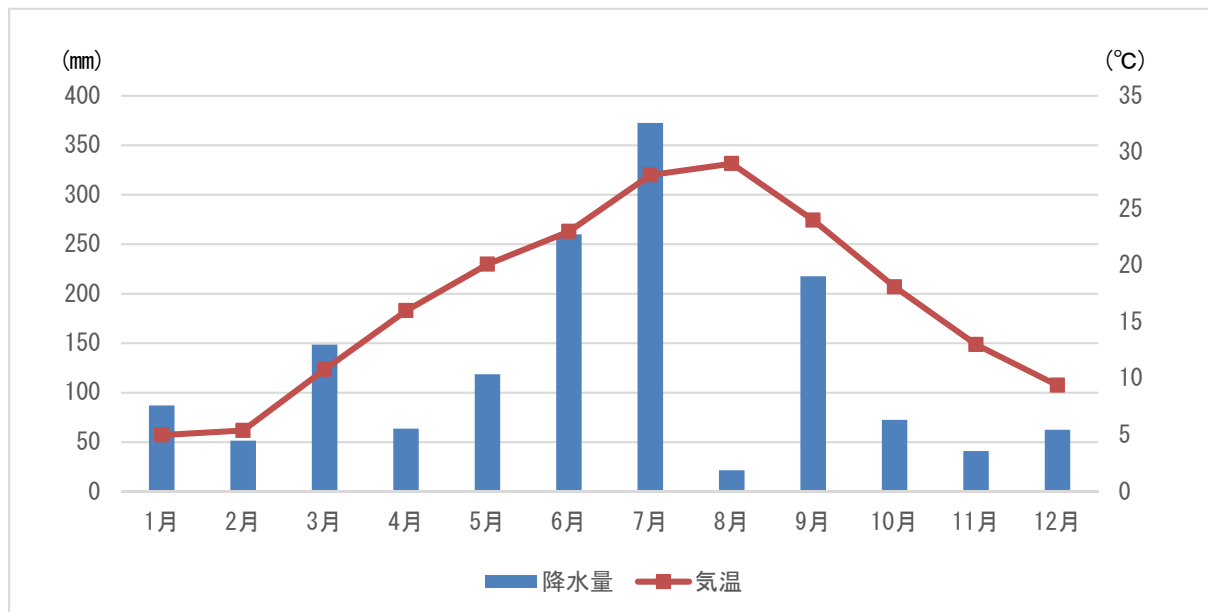


図 2-5 平成 30 (2018) 年 月別平均気温と降水量

資料：気象庁ホームページ前原観測所

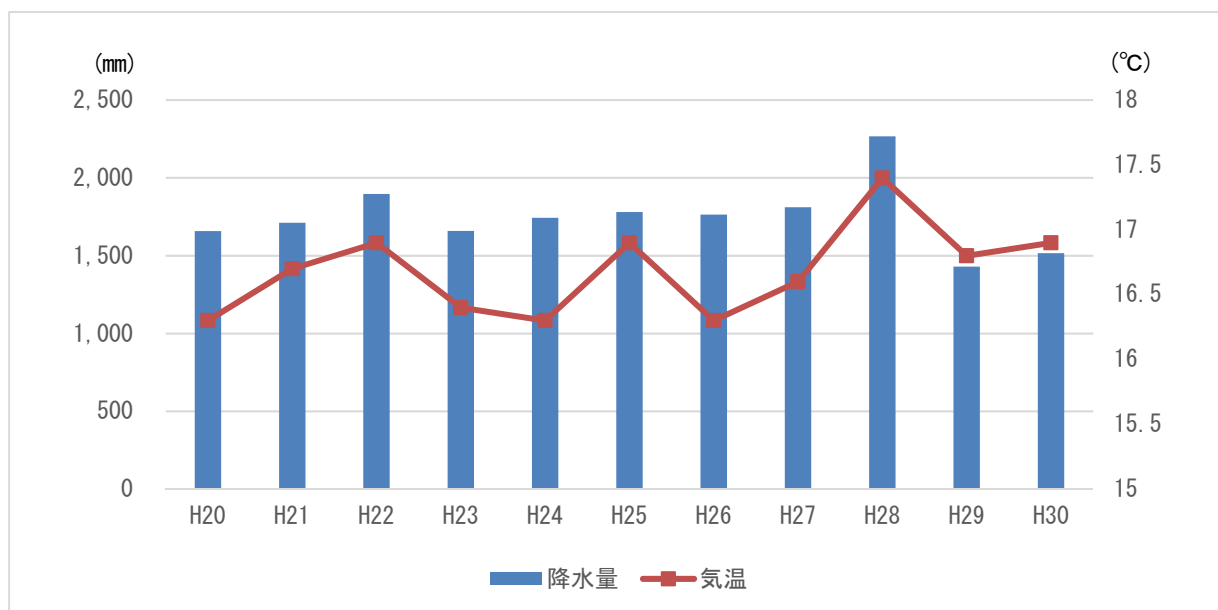


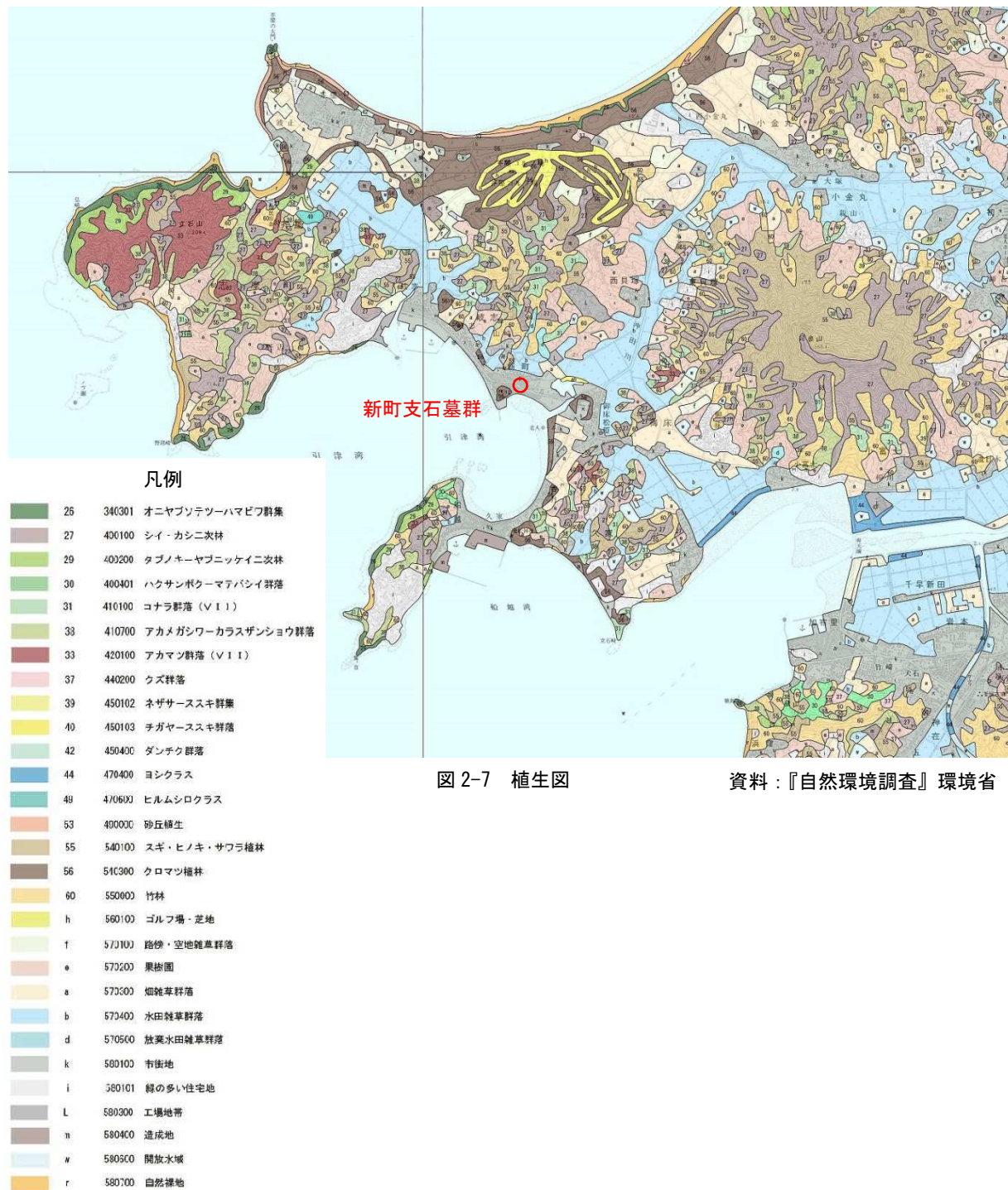
図 2-6 過去 10 年の平均気温と降水量

資料：気象庁ホームページ前原観測所

第2章 史跡の概要

5) 植生

糸島市内の植生を見ると糸島平野を中心とした市街地中心の水田雑草群落が広がり、南部の脊振山地を中心として、スギ・ヒノキ・サワラ植林が大半を占める。糸島半島の立石山には、海沿いのアカマツ群落が見られる。



6) 動物相

【イノシシ】

山間部において深刻な被害をもたらしている。平成 22(2010)年度から平成 28(2016)年度にかけて侵入防止柵等の設置及び捕獲を行ったことから、被害防止効果があったが、なお被害総額のおよそ 2 分の 1 を占める状況となっている。主な被害作物は水稻、野菜、柑橘類である。

【アナグマ】

中山間地域だけではなく、市街地周辺の側溝や小屋等にも棲み着き、全域にわたって被害がでている。トウモロコシを中心にビワやスイカ等家庭菜園の農作物を食害しており、簡易的なネットを張って防除をしているが、ネットの下から侵入し、被害は拡大している。

【ニホンザル】

脊振山系に沿った地域で農作物被害や家屋等の生活環境被害等が拡大している。

糸島市では二丈地区の鹿家や吉井での被害が大半であり、ビワ、ミカンといった果樹の被害がその殆どである。近年ではハウレンソウや大根等、あらゆる野菜の食害や引き抜きなどの被害があり、人里には数十頭の群れも確認されている。平成 22 年 12 月の調査では、1 集団が 180 頭の群れで移動していることが確認されたが、現在は群れが分割している模様である。また、近年は人を恐れなくなっており、ミカンの収穫中に隣の木でサルがミカンを取っていることもあるほど、人間に馴れてきている。またロケット花火やエアガンによる追い払いも効果が薄くなってきている。

【鳥類】

ヒヨドリによる被害は全域にわたり、柑橘類やキャベツやブロッコリー等を食害している。本来は渡り鳥であるが、定着しており、年間を通して被害がある。

表 2-1 被害の現状

	イノシシ	アナグマ	ニホンザル	ヒヨドリ	カラス	カモ
被害金額	63,891 千円	26,551 千円	5,080 千円	12,681 千円	10,796 千円	5,011 千円
被害面積	47.73ha	4.62ha	1.36ha	4.28ha	3.13ha	4.14ha

資料：平成 29 年度 福岡・糸島地域広域鳥獣被害防止計画

指定地周辺ではシカやサル、タヌキ、アナグマ等が生息していることが確認されており、特にイノシシの侵入や掘り返しの被害等がある。

(2) 歴史的環境

1) 歴史的変遷

ここでは糸島地域における歴史的変遷を、糸島半島東部(福岡市西区)の状況を一部含み概観する。

【旧石器時代】

糸島地域において、旧石器時代の人々の痕跡は少ない。井田原開古墳では三稜尖頭器、泊リュウサキ遺跡では船底形細石刃核、三雲・井原遺跡ヤリミゾ地区では角錐状石器が出土している。また、糸島半島東部の大原D遺跡や今山遺跡、今宿五郎江遺跡などでも旧石器が発見されている。

【縄文時代】

縄文時代になると前時代から引き続き狩猟・採集を生業とするものの定住化がはじまるようになる。生活を伝える主な遺構としては貝塚が点在するが、糸島半島部の旧海岸線沿いには新町貝塚、天神山貝塚、桑原飛櫛貝塚、元岡瓜尾貝塚などが分布し、貝殻や獣、魚などの骨とこれに混じって釣針や銚、ヤスなどの漁撈具や土器などが出土している。また、貝塚の中からは墓が検出されることがあり、新町貝塚や桑原飛櫛貝塚では腕に貝輪を装着した女性人骨などが出土している。住居跡としては大原D遺跡を最古例として、石崎矢風遺跡、岐志元村遺跡、上深江小西遺跡などで発見されている。このうち、上深江小西遺跡では大量の黒曜石の縦長剥片やチップが出土していることから、石器製作工房であったと同時に石材の産地と消費地とを中継する流通拠点の一つであったことが指摘されている。



写真 2-1 新町貝塚出土縄文人骨

本格的な稲作が開始される前、北部九州では雑穀類の栽培がおこなわれていたと考えられている。広田遺跡からは土掘り具や収穫具として使われた石器が出土しており、縄文時代晩期に原始的な農耕が行われていた可能性が高いことがわかった。弥生時代に入ると、北部九州は他に先駆けて水田耕作を開始することとなるが、このように農耕に対する素地が出来上がっていたことが要因のひとつと考えられる。

【弥生時代】

弥生時代になると遺跡数が飛躍的に増加する。糸島地域における弥生時代のはじまりを伝える主な遺跡としては石崎矢風遺跡・石崎曲り田遺跡、新町支石墓群をはじめとして、志登支石墓群・三雲石ヶ崎支石墓・井田用会支石墓・長野宮ノ前遺跡などの支石墓群等が挙げられる。石崎曲り田遺跡では朝鮮半島系の丹塗磨研土器や磨製石器、紡錘車などとともに炭化米が出土しており、わが国最古例となる板状鉄斧も出土している。また、この遺跡の東側低地部にある石崎大坪遺跡で水田遺構が検出されており、南に位置する海老ノ峰遺跡では朝鮮半島に由来があるとされる松菊里型住居が確認されている。糸島地域では上記のとおり稲作開始期の遺物や遺構が色濃く残っているといえ、弥生文化発祥の地のひとつとして位置づけることができる。

弥生時代に始まった稲作は小平野や河川単位で土地争いや水争いを引き起こす要因にもなった。新町支石墓群で発見された石鏃が打込まれた人骨を始め、甕棺の中から石鏃の破片が出土する例が見つかっており、これらは戦闘による戦死者の墓と考えられている。戦闘などの結果、弥生時代前期末～中期初頭になるとそれぞれの小地域を束ねる首長が誕生したと考えられる。久米遺跡や西古川遺跡、上町向原遺跡、井原赤崎遺跡などでは青銅製の武器類が出土しており、潤地頭給遺跡、石崎小路遺跡、木舟三本松遺跡などでは装身具類が出土している。これら副葬品をもつ墓は小地域の首長墓と位置付けられ、こののちに誕生する「伊都国」の成立過程を知ることができる貴重な手がかりとなっている。



写真 2-2 久米遺跡出土銅剣・銅戈

「伊都国」は『魏志』倭人伝に記された国の一つである。伊都国は倭人伝の文中に「世有王（世々王有り）」と記されており、糸島地域ではこれを裏付けるように3基の王墓が発見されている。三雲南小路、井原鍵溝、平原の三王墓で、それぞれ大量の銅鏡をはじめ、青銅製品、装身具、武器類など大陸・朝鮮半島からもたらされた貴重な品々を含む副葬品を供えており、王の権威の強大さを示すとともに、伊都国の繁栄ぶりを今に伝えている。

この伊都国における中心集落は三雲・井原遺跡であるが、糸島地域はこの集落を中軸としつつ、小平野ごとにも拠点置き、機能分化した集落構造が成り立っている。例えば志摩地区においては大型の建物が検出された一の町遺跡を拠点とし、海浜部の御床松原遺跡と連携して大陸との交易にも携わっていた可能性がある。同様の構造は糸島地域内の他の地区においてもみられ、伊都国の繁栄の礎となっていたと考えられる。

【古墳時代】

古墳時代に入ると近畿を中心としたヤマト政権が確立し、伊都国もこの体制に組み込まれていくこととなる。ただ、この体制の象徴である前方後円墳には銅鏡、装身具、武器類が副葬されており、伊都国を始め北部九州で盛行した葬送儀礼における近畿との同調性が古墳時代に見られる。糸島地域では古墳が総数で約1000基ほど確認されており、このうち前方後円墳は60基を数え、全国屈指の密集度を誇っている。これらのことから、糸島地域は古墳時代において、ヤマト政権と深い関係にあったことがわかる。

現在、糸島地域最古の前方後円墳とされるのは御道具山古墳である。全長は65mで、後円部の裾部からは周溝が、基底部からは葺石が確認されており、周溝からは布留式古段階の土器が出土している。本地域最大の前方後円墳は長野川流域にある全長103mの一貴山銚子塚古墳である。この古墳からは鍍金方格規矩四神鏡、内行花文鏡、三角縁神獣鏡など合計10面の銅鏡が出土しており、強大な権力を有した首長の存在が浮かび上がる。また、志摩地区最大の前方後円墳は初川流域に築かれた推定全長90mの井田原開古墳である。墳丘では円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪などが確認されており、後円部付近からは内行花文鏡が出土している。

4世紀後半から5世紀になると、古墳文化の画期となる横穴式石室が大陸から伝えられる。糸島地域では鋤崎古墳を始めとして、丸隈山古墳、釜塚古墳、狐塚古墳、兜塚古墳などに次々と導入された。このうち、釜塚古墳は長野川流域に位置する大型の円墳で、墳丘規模は直径

56m、周濠とこれを囲む周堤を含むと墓域は89mにおよぶ。周濠からは石見型木製品が完形で出土しており、ヤマト王権との密接な関係をうかがわせる資料となった。

古墳時代の集落跡としては合計68軒の竪穴住居が検出された御床松原遺跡が知られている。竪穴住居の平面形態は方形で、遺跡からは、釣針や鉾、アワビオコシを含む鉄器類や銅鏡片、銅鏃、石錘、装身具類などが出土しており、漁撈や交易活動に携わっていたことがわかる。



写真 2-3 御床松原遺跡の調査風景

古墳時代の特徴的な遺跡としては玉作集落がある。潤地頭給遺跡では弥生時代終末～古墳時代前期前半にかけての玉作工房群が検出され、出雲産である碧玉や水晶を主原石とし、各種の玉類を製作していた。また、遺跡からは井戸枠に転用された準構造船が出土しており、玉作に関わる交易に使用された可能性が高いと考えられている。

【飛鳥時代・奈良時代・平安時代】

糸島地域には古代山城である雷山神籠石と怡土城が築かれる。雷山神籠石は城内中央の谷部を囲むように造られており、現状で南北の水門と列石が残っている。怡土城は高祖山の山頂から西側斜面にかけて築かれており、山の麓には長さ約2kmに渡る土塁があり、山の稜線には望楼を配置している。これら古代山城は北部九州防衛の拠点として築かれたと考えられており、当時の国際関係の緊張状態を今に伝える遺跡である。

奈良時代は中央集権化が進んだ時代でもあった。全国に官道が整備され、都と地方の国衙が最短距離で結ばれるようになった。この官道には約15kmごとに駅家が置かれたが、糸島地域では塚田南遺跡と曲り田遺跡で道路と側溝、大型掘立柱建物などが検出されており、深江駅家と推定されている。

奈良時代になると各地に国分寺・国分尼寺が建てられるなど、わが国固有の仏教文化が花開くこととなる。糸島地域においては雷山千如寺、染井山霊鷲寺、鉢伏山金剛寺、小倉山小蔵寺、楠田寺、一貴山夷巍寺、久安寺の7ヶ所の大寺が創建され、「怡土郡七ヶ寺」と称せられた。このうち、雷山千如寺大悲王院と、久安寺の什宝を伝える浮嶽神社には、重要文化財である仏像など数々の文化財を今に伝えている。

寛仁3(1019)年には女真族が糸島地域を始め、北部九州沿岸地域を荒らしまわった「刀伊の入寇」が起こる。糸島地域における被害は甚大であり、死者161人、拉致者651人を出した。



写真 2-4 木造千手観音立像



写真 2-5 雷山神籠石



写真 2-6 怡土城跡

【鎌倉時代・室町時代】

糸島地域では、12世紀半ばに怡土荘(仁和寺法金剛院)が成立、承久の乱後に地頭が設置される。

怡土荘内の今津は大隅国の異国警固番役地にあたり、大隅守護千葉氏が支配した。

弘安の役後の恩賞により大友氏が「志摩方三百町惣地頭職」を獲得し、次第に大友氏や北条氏の勢力が浸透していく。

木舟の森遺跡では鎌倉時代の濠に囲まれた建物を確認されており、武士の館と考えられている。遺跡からは大量の陶磁器が出土していることから中国との交易を経済基盤にしていたことが考えられる。中世の末期になると、糸島地域は豊後の大友氏と周防の大内氏の覇権争いの場となり、両氏に属した臼杵氏と原田氏が幾度となく戦闘を繰り返したが、大友氏の衰退もあって、最終的には原田氏が優勢となる。原田氏は高祖城を本拠としており、最盛期には怡土・志摩両郡と早良郡西部、松浦郡東部にまで勢力を伸ばした。糸島地域の山頂や丘陵上には城が多く築かれ、平野部には濠を巡らせた館が造られており、戦乱のようすを今に伝える。



写真 2-7 木舟の森遺跡出土龍泉窯系青磁碗

【江戸時代】

江戸時代になると糸島地域の北部と東部は福岡藩に属したが、西部は多数の領地に分割され、時期によって唐津藩領、中津藩領、幕府領、対馬藩領が混在した。福岡領との境を示す絵図と領境石が現在も残っている。



写真 2-8 領地境絵図

また、江戸時代には唐津と北九州を結ぶ唐津街道が整備され、糸島地域には、深江、前原、今宿の3箇所(3箇所)に宿場町が置かれた。この唐津街道は現在の国道202号線とほぼ同じルートであり、3箇所の宿場町はそれぞれの地区の中心市街地となっている。現在の道路とまちの原形が近世に形作られたことがわかる。



写真 2-9 福岡領境の境石群

【明治時代から現在】

明治22(1889)年、市町村制施行により、怡土郡飯場村が早良郡内野村に合併した。明治29(1896)年に怡土郡と志摩郡が合併し、糸島郡が成立した。明治34(1901)年には前原村が町制を施行し、前原町となる。昭和16・17(1941・1942)年と昭和36(1961)年には糸島郡の東部にあった今宿・今津・周船寺・元岡・北崎の5村が福岡市に編入された。昭和30(1955)年には合併により二丈村、志摩村が成立した。昭和40(1965)年には両村が町制を施行し、それぞれ二丈町、志摩町となり、平成4(1992)年には前原町が市制を施行し、前原市となった。平成22年1月1日には、1市2町が合併し、現在の糸島市が誕生した。

2) 市内の文化財の概要

市内には国指定文化財が16件、県指定文化財が25件、市指定文化財が41件、国の登録文化財が1件の合計83件の指定・登録文化財が所在する。指定文化財の多くは考古資料や彫刻、史跡、天然記念物などである。このように考古資料や史跡が多いのは、本市が『魏志』倭

第2章 史跡の概要

人伝に記される伊都国であったことから、弥生～古墳時代の重要遺跡の存在が古くから知られ、これらを中心に調査が進められてきた結果である。また、彫刻についても古くから重要な仏像の存在が多数知られ、個別に調査が行われ文化財指定を受けている。

①指定・登録件数

総計 83 件

国指定 16 件、県指定 25 件、市指定 41 件、国登録 1 件

②種類別

記念物 26 件、有形文化財 48 件、民俗文化財 8 件、登録有形文化財 1 件

③国指定文化財概要

国宝	考古資料	1 件	—	福岡県平原方形周溝墓出土品
有形文化財	彫刻	6 件	—	木造如来立像・木造地藏菩薩立像・木造仏坐像（浮嶽神社）、木造阿弥陀如来坐像（西林寺）、木造千手観音立像・木造清賀上人坐像（大悲王院）
記念物	史跡	8 件	—	曾根遺跡群、怡土城跡、銚子塚古墳、新町支石墓群、志登支石墓群、釜塚古墳、雷山神籠石、三雲・井原遺跡
	天然記念物	1 件	—	芥屋の大門



写真 2-10 福岡県平原方形周溝墓出土品



写真 2-11
木造阿弥陀如来坐像



写真 2-12
木造清賀上人坐像



写真 2-13 釜塚古墳



写真 2-14 新町支石墓群



写真 2-15 三雲・井原遺跡



写真 2-16 芥屋の大門

④県指定文化財概要

有形文化財	建造物	3件	—	桜井神社本殿・拝殿・楼門、桜井神社石橋、高祖神社本殿・拝殿
	彫刻	5件	—	木造薬師如来立像（大法寺）、銅造如来形坐像（聖種寺）、木造阿難尊者立像（龍国寺）、木造十一面観音立像（親山虚空蔵堂）、木造二天王立像（大悲王院）
	古文書	3件	—	大悲王院文書、喜多村家文書、文禄四年筑前国志摩郡御床村検地帳
	考古資料	3件	—	新町支石墓群出土品、舟形石棺、瓦経
	民俗文化財	無形	2件	— 高祖神楽、深江の川祭り
記念物	名勝	2件	—	桜井二見ヶ浦、白糸の滝
	天然記念物	7件	—	六所神社の樟、大悲王院の楓、大悲王院のビャクシン、雷山の観音杉、雷山神社の公孫樹、萬龍楓、泉川のハマボウ群落



写真 2-17 桜井神社楼門



写真 2-18
木造薬師如来立像



写真 2-19 高祖神楽



写真 2-20 新町支石墓群出土品 附 御床松原遺跡出土半両銭 貨泉



写真 2-21 白糸の滝



写真 2-22 桜井二見ヶ浦



写真 2-23 雷山神社の公孫樹



写真 2-24 泉川のハマボウ群落

第2章 史跡の概要

⑤市指定文化財概要

有形文化財	建造物	2 件	— 旧藤瀬家住宅、万葉歌碑
	彫 刻	3 件	— 夷巍寺金剛力士像、銅造如来形坐像、木造龍猛菩薩坐像
	古文書	3 件	— 藤瀬家文書、領地境絵図、鎌田龍一郎家文書
	考 古	15 件	— 銅矛鎔范、井原塚廻遺跡祭祀土壇出土土器、三雲・井原遺跡ヤリミゾ地区出土遺物、末永出土鬼瓦、石見型木製品、石崎地区遺跡群出土広形銅矛鋳型、末永高木遺跡出土刻字土器ほか
民俗文化財	無 形	6 件	— 福井神楽、大入盆綱引き、淀川の百々手祭り、白糸の寒みそぎほか
記念物	史 跡	5 件	— 井原 1 号墳、塚田南遺跡、長嶽山古墳群、二丈岳城ほか
	名 勝	2 件	— 油比の殿川、泊産安の井戸
	天然記念物	1 件	— 姉子の浜・鳴き砂

⑥国登録有形文化財 建造物 1 件 — 柗島家住宅



写真 2-25 万葉歌碑



写真 2-26
末永高木遺跡出土刻字土器



写真 2-27 藤瀬家文書



写真 2-28 福井神楽



写真 2-29 大入盆綱引き



写真 2-30 淀川の百々手祭り



写真 2-31 白糸の寒みそぎ

■ 糸島市文化財マップ

表 2-2 国指定文化財一覧●

	名 称	分 類	指定区分	員数	所 在 地 (糸島市)	指定年月日	備 考
1	福岡県平原方形周溝墓出土品 附 土器残欠・ガラス小玉・鉄鏃等 一括	有形文化財 (考古)	国宝	一括	井原916 伊都国歴史博物館	平成18年6月9日(国宝指定) 旧指定 福岡県平原方形周溝墓出土品 平成2年6月29日(重文指定)	告示92号・重要文化財 告示74号・国宝
2	木造千手観音立像	有形文化財 (彫刻)	重要文化財	1躯	雷山626 大悲王院	明治37年2月18日	
3	木造清賀上人坐像	有形文化財 (彫刻)	重要文化財	1躯	雷山626 大悲王院	大正3年4月17日	
4	木造仏坐像(伝薬師如来像)	有形文化財 (彫刻)	重要文化財	1躯	二文吉井954 浮嶽神社	大正7年9月12日	彫第2077号
5	木造地藏菩薩立像	有形文化財 (彫刻)	重要文化財	1躯	二文吉井954 浮嶽神社	大正7年9月12日	彫第2078号
6	木造如来立像	有形文化財 (彫刻)	重要文化財	1躯	二文吉井954 浮嶽神社	昭和47年5月30日	彫第3274号
7	木造阿弥陀如来坐像	有形文化財 (彫刻)	重要文化財	1躯	志摩御床355 西林寺	大正 3年 4月17日(国宝) 昭和25年 8月29日	彫第2081号
8	雷山神龍石	記念物	史跡		雷山967-4 ほか	昭和7年3月25日	国72号
9	志登支石墓群	記念物	史跡		志登586 ほか	昭和29年8月20日	国37号
10	怡土城跡	記念物	史跡		高祖1717 ほか	昭和13年8月8日 昭和19年6月5日(追加) 平成19年3月23日(追加)	国292号 国966号・一部追加指定 告示38号・追加指定
11	釜塚古墳	記念物	史跡		神在405 ほか	昭和57年5月7日	告示69号
12	曾根遺跡群 平原遺跡 ワレ塚古墳 銭塚古墳 狐塚古墳	記念物	史跡		有田1、曾根310 ほか	昭和57年10月4日 平成12年9月6日(追加)	告示141号 告示146号 ・平原遺跡一部追加
13	饒子塚古墳	記念物	史跡		二文田中100-4	昭和32年8月29日	告示第63号
14	新町支石墓群	記念物	史跡		志摩新町字ギ丁原71-1ほか	平成12年9月6日	告示143号
15	芥屋の大門	記念物	天然記念物		志摩芥屋604-1ほか	昭和41年 3月 3日	告示10号
16	三雲・井原遺跡	記念物	史跡		三雲52ほか	平成29年10月13日	告示137号

表 2-3 県指定文化財一覧●

	名 称	分 類	指定区分	員数	所 在 地 (糸島市)	指定年月日	備 考
1	瓦経	有形文化財	考古	7個	前原南二丁目21-1 福岡県立糸島高等学校	昭和30年3月5日	県考第8号
2	舟形石棺	有形文化財	考古	1基	前原南二丁目21-1 福岡県立糸島高等学校	昭和36年1月14日	県考第65号
3	新町支石墓群出土品 附 御床松原遺跡出土半両銭1点 貨泉2点	有形文化財	考古	1括	志摩初1 志摩歴史資料館	平成15年2月5日	県考第97号
4	大悲王院文書	有形文化財	古文書	493点	雷山626 大悲王院	昭和55年3月1日	県書第17号
5	喜多村家文書	有形文化財	古文書	139点	雷山626 大悲王院	昭和55年3月1日	県書第18号
6	文祿四年筑前国志摩郡御床村検地帳	有形文化財	古文書	1冊	志摩御床441-2	平成20年 3月31日	
7	木造二天王立像	有形文化財	彫刻	2躯	雷山626 大悲王院	平成14年4月5日	県彫刻第59号
8	木造薬師如来立像	有形文化財	彫刻	1躯	二文福井4576 大法寺	平成5年7月2日	県彫刻第49号
9	木造阿難尊者立像	有形文化財	彫刻	1躯	二文波呂474 龍国寺	昭和45年5月2日	県彫刻第31号
10	銅造如来形坐像	有形文化財	彫刻	1躯	二文上深江66-1 聖種寺	昭和57年4月1日	県彫刻第44号
11	木造十一面観音立像	有形文化財	彫刻	1躯	志摩小金丸578 満福寺	平成11年3月19日	県彫刻第54号
12	桜井神社本殿・拝殿・楼門	有形文化財	建造物	3棟	志摩桜井4227 桜井神社	昭和52年 4月 9日 平成 9年 7月25日(追加)	県建第30号
13	桜井神社石橋 附 御池石垣、石段 一基	有形文化財	建造物	1基	志摩桜井4227 桜井神社	平成15年 2月 5日	県建第42号
14	高祖神社本殿・拝殿 附 石造明神鳥居 1基 鳥居正面石 段 1基 棟札8枚 板札3枚	有形文化財	建造物	2棟	高祖1240 高祖神社	平成24年3月26日	
15	高祖神楽	民俗文化財	無形	1件	高祖1240 高祖神社	昭和56年3月5日	県無民第69号
16	白糸の滝	記念物	名勝		白糸	昭和35年4月12日	県名第4号
17	桜井二見ヶ浦	記念物	名勝		志摩桜井4433-1ほか	昭和43年 2月 3日	県名第5号
18	大悲王院のビヤクシン	記念物	天然記念物	1本	雷山626 大悲王院	昭和36年1月14日	県天第49号
19	大悲王院の楓	記念物	天然記念物	3本	雷山626 大悲王院	昭和36年1月14日	県天第50号
20	雷山神社の公孫樹	記念物	天然記念物	1本	雷山宇中坊148 雷神社	昭和35年4月12日	県天第38号
21	雷山の観音杉 2本	記念物	天然記念物	2本	雷山宇中坊148 雷神社	昭和35年4月12日	県天第40号
22	萬龍楓	記念物	天然記念物	4本	白糸	昭和35年4月12日	県天第39号
23	六所神社の樟	記念物	天然記念物	2本	志摩馬場344-1 六所神社	昭和35年 4月12日	県天第41号
24	深江の川祭り	民俗文化財	無形	1件	糸島市二文深江・二文片山・ 二文松末	平成27年 3月17日	
25	泉川のハマボウ群落	記念物	天然記念物	1件	糸島市前原、志摩小富士、荻 浦	平成28年3月25日	天第142号

第2章 史跡の概要

表 2-4 市指定文化財一覧●

	名 称	分 類	指定区分	員数	所 在 地 (糸島市)	指定年月日	備 考
1	銅矛銘范	有形文化財	考古	1個	前原南二丁目21-1 福岡県立糸島高等学校	昭和46年5月19日	
2	砂魚塚古墳及び坂の下5号墳石室	有形文化財	考古	2基	前原市美咲が丘一丁目 菰浦はな咲公園	平成19年12月28日	
3	井原塚廻遺跡祭祀土壇出土土器	有形文化財	考古	10点	井原916 伊都国歴史博物館	平成17年4月26日	
4	三雲・井原遺跡やリミノ地区出土遺物	有形文化財	考古	一括	井原916 伊都国歴史博物館	平成19年12月28日	
5	末永出土土甕瓦	有形文化財	考古	1枚	井原916 伊都国歴史博物館	平成20年3月19日	
6	多久遺跡D地点1号火葬墓出土品	有形文化財	考古	1件	井原916 伊都国歴史博物館	平成21年3月31日	
7	石見型木製品	有形文化財	考古	1件	井原916 伊都国歴史博物館	平成21年12月28日	
8	上鎌子遺跡出土土器	有形文化財	考古	一括	井原916 伊都国歴史博物館	平成11年4月26日	
9	末永高木遺跡出土刻字土器	有形文化財	考古	1個	井原916 伊都国歴史博物館	平成12年5月29日	
10	西堂古賀崎古墳出土遺物	有形文化財	考古	一括	井原916 伊都国歴史博物館	平成12年6月26日	
11	浦志遺跡A地点出土小銅鐸	有形文化財	考古	1個	井原916 伊都国歴史博物館	平成12年6月26日	
12	上町向原遺跡出土素環頭大刀	有形文化財	考古	1点	井原916 伊都国歴史博物館	平成15年3月25日	
13	井田用会支石墓上石	有形文化財	考古	1点	井田292 三社神社	平成19年12月28日	
14	旧 藤瀬家住宅	有形文化財	建造物	1棟	井田702-1 平原歴史公園多目的広場内	平成18年3月17日	
15	万葉歌碑	有形文化財	建造物	1	二丈深江2143 鎮懐石八幡宮	昭和59年3月31日	二丈町指文第1号
16	銅造如来形坐像	有形文化財	彫刻	1躯	二丈福井2762	平成13年9月25日	二丈町指文第6号
17	夷嶺寺金剛力士像	有形文化財	彫刻	2躯	二丈一貴山	平成9年2月9日	二丈町指文第2号
18	領地境絵図	有形文化財	古文書	一括	井原916 伊都国歴史博物館	平成17年4月26日	
19	藤瀬家文書	有形文化財	古文書	1件	井原916 伊都国歴史博物館	平成14年6月26日指定 平成30年3月30日追加	
20	加布里山笠	民俗文化財	無形	1件	加布里545 加布里天満宮	平成6年12月27日	
21	福井神楽	民俗文化財	無形	1件	二丈福井4909 白山神社	平成11年10月25日	二丈町指文第5号
22	大入盆綱引き	民俗文化財	無形	1件	二丈福井	平成17年3月31日	二丈町指文第7号
23	長嶽山古墳群	記念物	史跡	1件	川付701ほか	平成21年3月31日	
24	井原1号墳	記念物	史跡	1箇所	井原541	平成16年6月30日	
25	塚田南遺跡	記念物	史跡	1箇所	二丈深江2057	平成10年3月26日	二丈町指文第3号
26	二丈岳城	記念物	史跡	1箇所	二丈深江、二丈一貴山、二丈福井	平成20年11月25日	二丈町指文第8号
27	泊産安の井戸	記念物	名勝	1箇所	泊1760	平成16年6月30日	
28	油比の殿川	記念物	名勝	1箇所	油比183-1	平成6年12月27日	
29	姉子の浜・鳴き砂	記念物	天然記念物	1箇所	二丈鹿家	平成10年7月27日	二丈町指文第4号
30	久米遺跡6号・23号甕棺墓出土品	有形文化財	考古	一括	志摩初1 志摩歴史資料館	平成23年5月20日	糸島市指定有形文化財第1号
31	石崎地区遺跡群出土広形銅矛鏃型	有形文化財	考古	3点	井原916 伊都国歴史博物館	平成24年3月6日	糸島市指定有形文化財第2号
32	青木家文書	有形文化財	古文書・典籍	3点	井原916 伊都国歴史博物館	平成25年5月31日	糸島市指定有形文化財第3号
33	菩薩形鏡像	有形文化財	工芸品	1点	井原916 伊都国歴史博物館	平成25年5月31日	糸島市指定有形文化財第4号
34	住吉神社伝来仏画	有形文化財	絵画	3点	井原1321-1 井原1255	平成26年3月31日	糸島市指定有形文化財第5号
35	淀川の百々手祭り	民俗文化財	無形	1件	二丈深江 淀川天神社	平成26年3月31日	糸島市指定無形民俗文化財第1号
36	福岡領境の境石群	記念物	史跡	1件	多久・東・神在・富・香力・三坂・雷山・飯原	平成27年 3月24日 平成30年3月30日追加	糸島市指定史跡第1号
37	嘉永五年寺山干拓潮止図	有形文化財	歴史資料	1点	井原916 伊都国歴史博物館	平成27年3月24日	糸島市指定有形文化財第6号
38	白糸の寒みそぎ	民俗文化財	無形	1件	白糸684 熊野神社	平成28年3月31日	糸島市指定無形民俗文化財第2号
39	木造龍猛菩薩坐像	有形文化財	彫刻	1点	二丈深江1274 正覚寺	平成28年3月31日	糸島市指定有形文化財第7号
40	桜井神社の餅押し	民俗文化財	無形	1件	志摩桜井4227	平成31年3月18日	糸島市指定無形民俗文化財第3号
41	鎌田龍一郎家文書	有形文化財	古文書	一括 (895点)	志摩御床431-1	平成31年3月18日	糸島市指定有形文化財第8号

表 2-5 国登録文化財●

	名 称	分 類	指定区分	員数	所 在 地 (糸島市)	指定年月日	備 考
1	枇島家住宅	登録有形文化財	建造物	8	二丈田中宇大塚101	平成29年5月2日	登録番号40-0140～0147

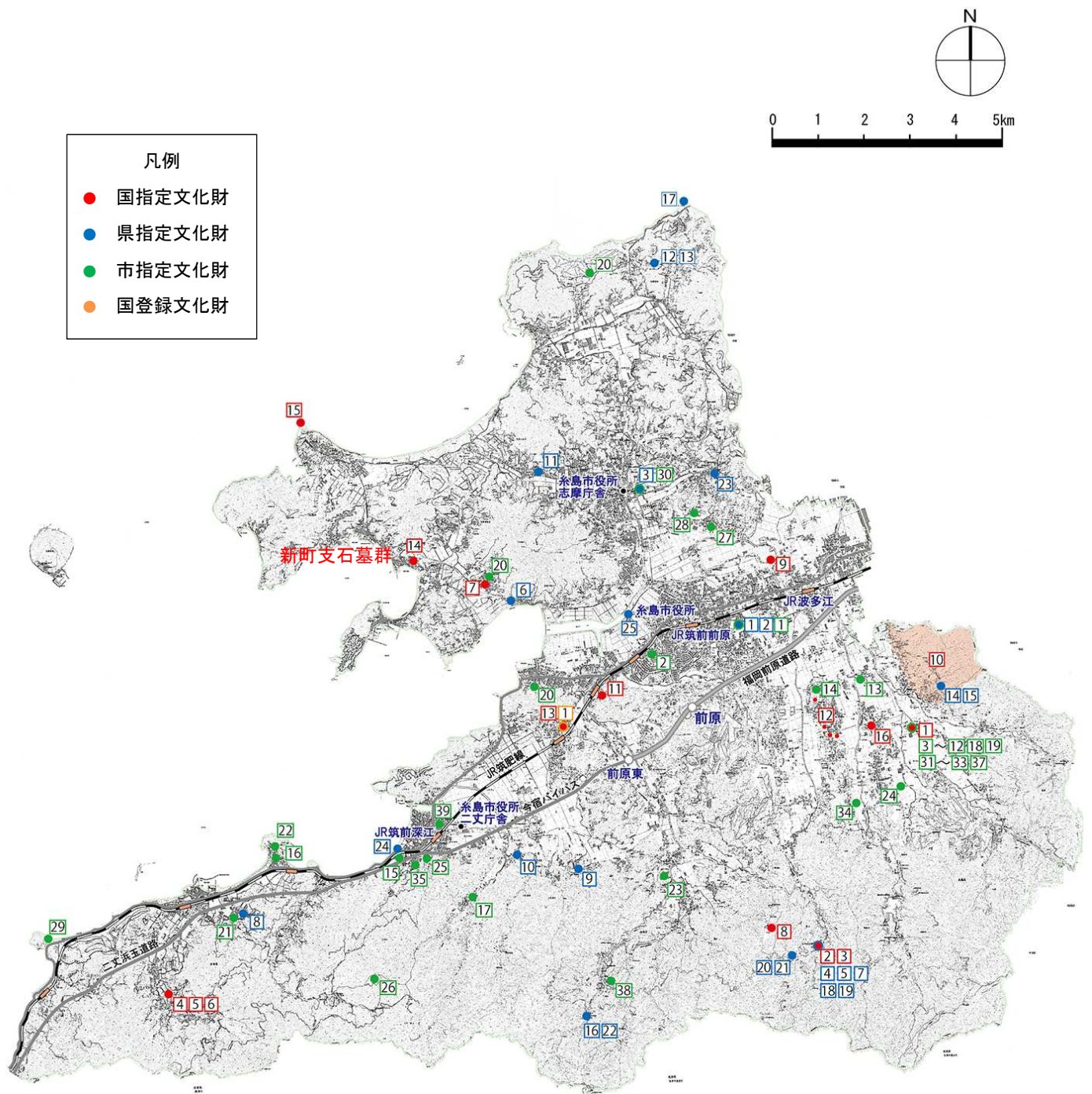


図 2-8 糸島市文化財マップ

※市指定 No. 36「福岡領境の境石群」は場所が広域となるため、マップには表記しない。

(3) 社会的環境

1) 人口と世帯数

①糸島市の人口と世帯数の推移

本市の人口は緩やかに増加を続け、合併した時点では人口が100,551人であり、その後やや減少するが、再び増加傾向を示し平成31(2019)年で101,450人である。

世帯数は増加を続けており、平成31年には42,267世帯となり、この22年間で約1.5倍になっている。

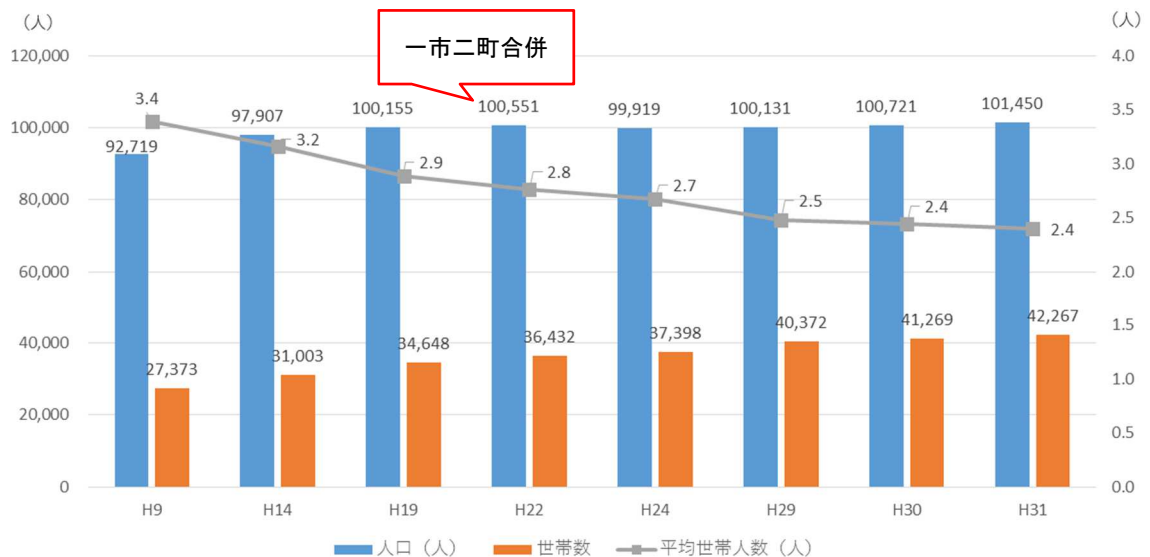


図 2-9 糸島市の人口・世帯の推移

資料：住民基本台帳

②志摩新町の人口と世帯数の推移

指定地は志摩新町に位置し、人口は平成14(2002)年の678人をピークに緩やかに減少し、平成31年で566人である。

世帯数は平成24(2012)年に233世帯となり、ほぼ変化していない。

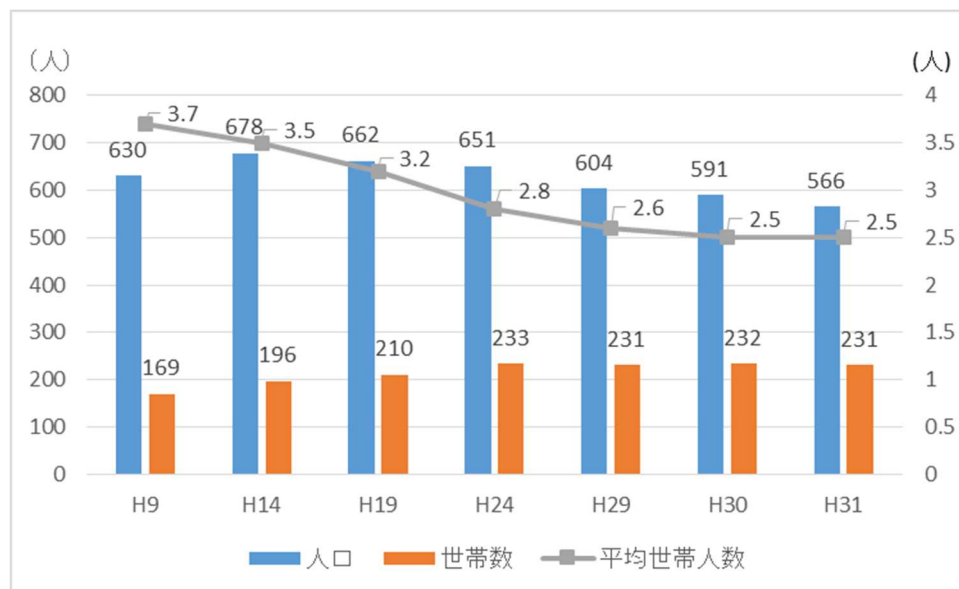


図 2-10 志摩新町の人口と世帯数の推移

資料：住民基本台帳

2) 土地利用

指定地周辺は、主に住宅用地や農地である。

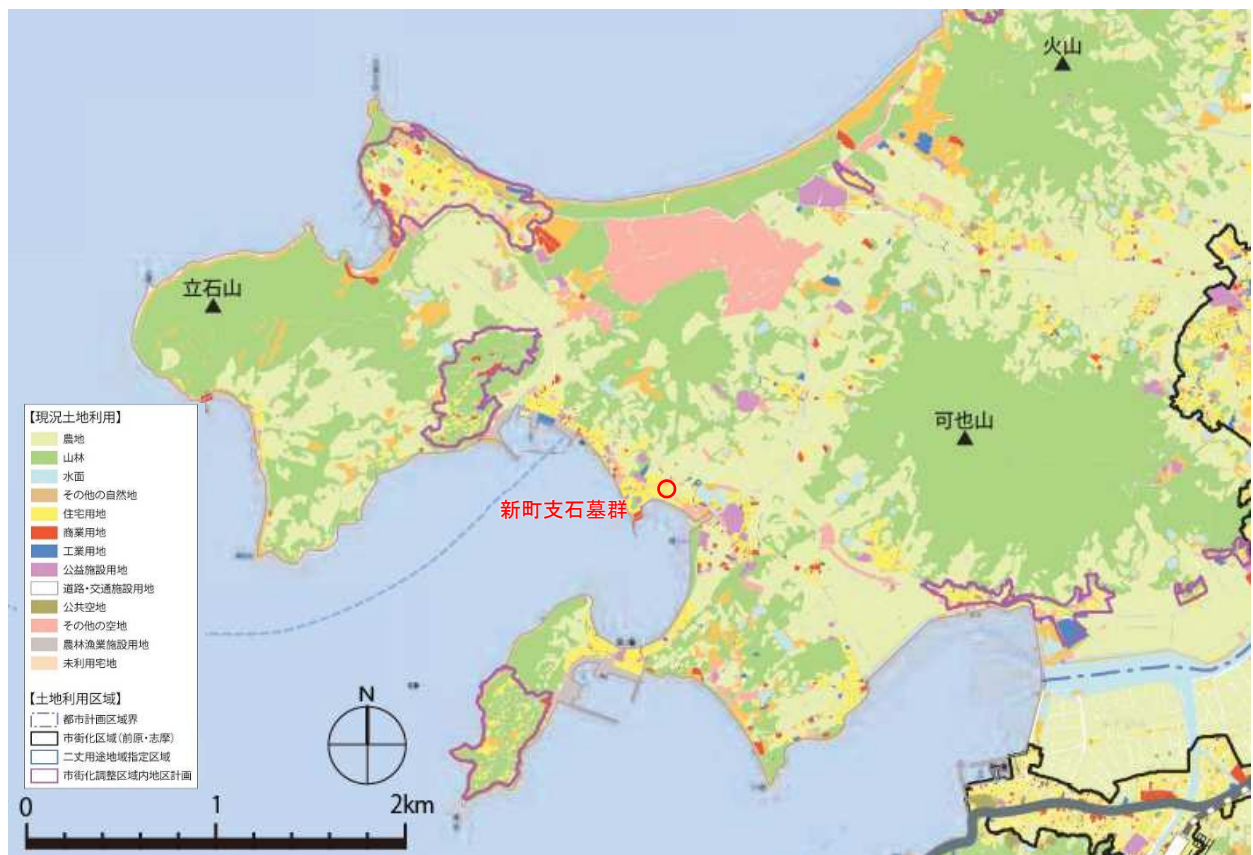


図 2-11 土地利用現況図

3) 法規制状況

指定地は、市街化調整区域であり、土地利用に制限がかかる。なお、周辺に田園が広がるが、農用地区域及び農業振興地域には指定されていない。また、糸島半島の海岸線は福岡県による玄海国定公園の一部であるが、本指定地は当公園の範囲には含まれない。

4) 交通

糸島市の中を東西方向に JR 筑肥線、国道 202 号バイパス、西九州自動車道がほぼ並行して走り、南部の山麓には主要地方道大野城二丈線が東西に走っている。西九州自動車道の開通や JR 筑肥線の電化・複線化、福岡市営地下鉄との相互乗り入れなどに伴い、九州一の繁華街でもある福岡市天神、九州の鉄道の玄関口である JR 博多駅、空の玄関口である福岡空港へも短時間で移動が可能となり、通勤・通学時間も大幅に短縮された。

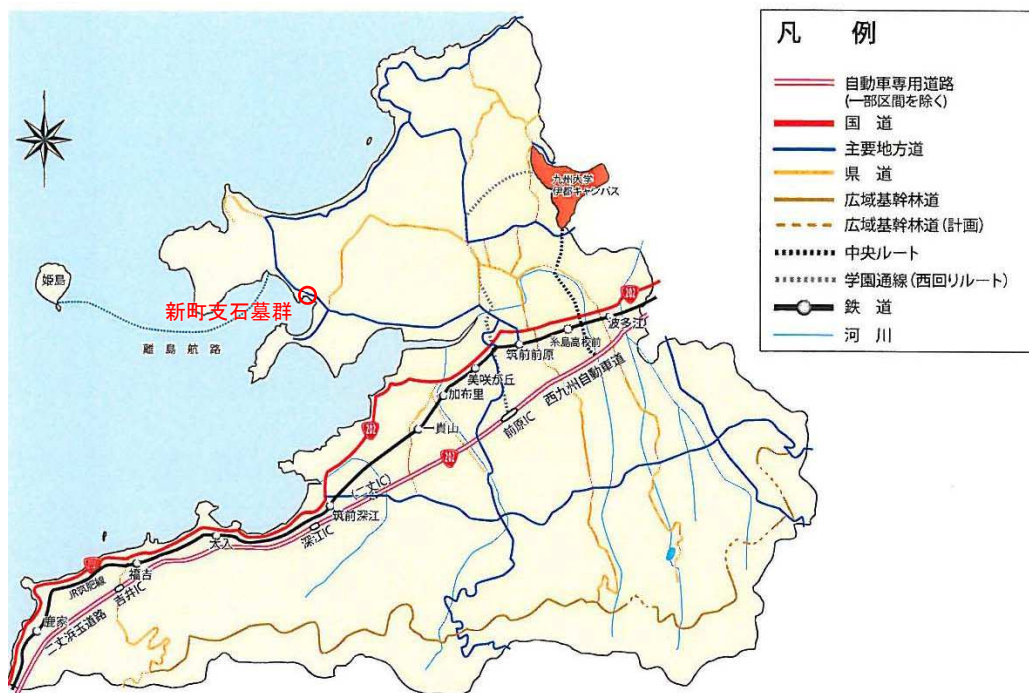


図 2-12 交通体系図

5) 観光

糸島市の観光入込客数はこの 10 年で 433 万 8 千人 (平成 20 年) から 682 万 7 千人 (平成 30 年) に増加している (157% 増)。

観光客の来訪の目的は「産直 (製品の購入や直売所への来訪)」(42.0%) が最も多く、次いで、「温浴施設」(10.6%)、「飲食店」(10.3%)、「神社・文化財等 (史跡等の訪問)」(8.2%) となっている。

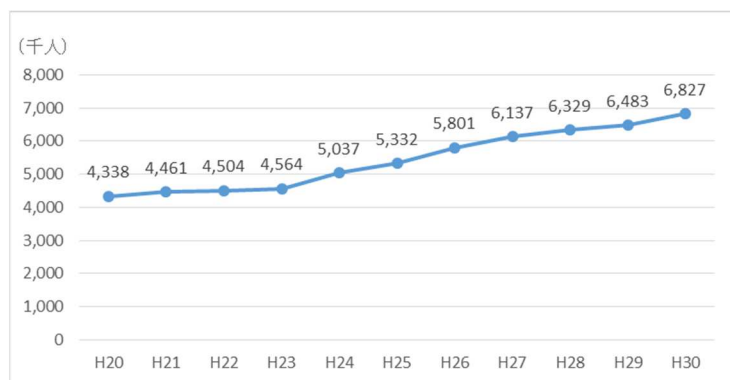


図 2-13 糸島市観光入込者数

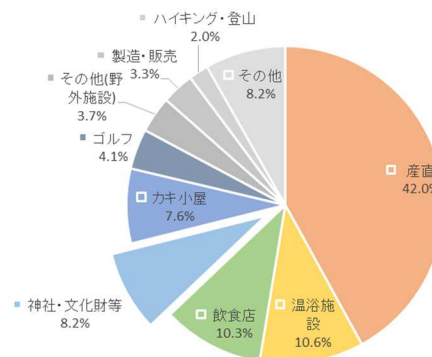


図 2-14 糸島市への来訪目的

(第 2 次糸島市観光振興基本計画「糸島市の観光入込客数の推移」「糸島市への来訪目的」を基に作成)

6) 景観特性

3つの岬と2つの入り江からなる天然の良港であったこの一帯では、玄界灘の荒々しい姿とは異なる穏やかな海浜景観を今も変わらず眺めることができる。また、湾の背後には糸島富士と称される美しい可也山がそびえ、海と山の間に点在する農地や集落とともに、古代と同じ景観を体感することができる。



図 2-15 糸島市景観特性図

資料：糸島市文化財保存整備基本計画

表 2-6 糸島市景観特性分類表抜粋

分類	特徴	地形特性	主な文化財
海浜と景勝地	「芥屋の大門」として広く知られる名勝奇岩は、その際だった姿が海浜部の景観的なシンボルとして存在するだけでなく、糸島の海＝芥屋の大門とイメージされるなど、糸島市を代表するシンボルともなっている。 白砂の連続する幣の浜と奇岩(芥屋の大門)の対比や、眼前に広がる玄界灘の夕陽は、雄大な自然を感じさせる大切な資源である。	海浜：幣の浜（にぎのはま）芥屋の大門から野北まで	芥屋の大門、桜井二見ヶ浦、桜井神社
入り江と半島	2つの湾(引津湾、船越湾)と3つの岬(野辺崎、鷺の首、大崎)が形作る地形は、陸の緑と海や空の青が見え隠れする奥行きのある海浜景観をつくり出している。	海浜：引津湾、船越湾 野辺崎、鷺(さぎ)の首、大崎	新町支石墓群

資料：糸島市文化財保存整備基本計画

第2節 史跡の概要

(1) これまでの経緯

新町支石墓群の発掘から指定地購入に至るこれまでの経緯を下表に整理する。

表 2-7 これまでの経緯

年 号	事 柄
大正 6 (1917) 年	中山平次郎博士が遺跡を紹介
昭和 60 (1985) 年	新町支石墓群内にて個人住宅の計画があがる
昭和 61 (1986) 年	弥生時代早期の支石墓群の発掘調査 (第 1 次調査)
昭和 62 (1987) 年	弥生時代前期の甕棺墓の発掘調査 (第 2 次調査)
平成元 (1989) 年	古墳時代前期の箱式石棺墓を発掘調査 (第 3 次調査)
平成 2 (1990) 年	中世人骨、縄文時代の遺構の調査 (第 4 次調査)
平成 3 (1991) 年	縄文時代後期の貝塚・人骨の調査 (第 5 次調査)
平成 5 (1993) 年	第 1 次調査地点を志摩町史跡に指定 (2 月 1 日告示) 「新町遺跡展示館」建設地の造成に伴う発掘調査 (第 6 次調査) 「新町遺跡展示館建設」
平成 12 (2000) 年	国史跡に指定される。名称は「新町支石墓群」となる (9 月 6 日告示)
平成 15 (2003) 年	新町支石墓群より出土遺物と人骨、御床松原遺跡出土貨泉と半両銭が一括して福岡県文化財 (考古資料) に指定される (2 月 5 日告示)
平成 16～17 (2004～2005) 年	新町遺跡環境整備推進委員会開催
平成 17 (2005) 年	福岡西方沖地震発生
平成 19 (2007) 年	新町支石墓群指定地購入事業開始
平成 22 (2010) 年	一市二町合併。糸島市誕生
平成 23 (2011) 年	糸島市文化財保存整備基本計画策定に伴い志摩新町行政区で新町支石墓群の活用を考えるワークショップを開催
平成 28 (2016) 年	新町支石墓群指定地購入事業終了



写真 2-32 指定地の空中写真 撮影日：令和元年 12 月 9 日

(2) 指定の状況

1 (1) 名 称 新町支石墓群

(2) 種 別 史跡

(3) 所在地及び地域 福岡県糸島市志摩新町字ギ丁原

54 番 1、55 番、56 番、57 番、58 番 1、58 番 2、58 番 3、58 番 4、58 番 5、
 58 番 6、58 番 7、58 番 8、58 番 9、58 番 10、58 番 11、58 番 12、58 番 13、
 59 番 1、59 番 2、60 番、61 番、62 番 1、62 番 2、62 番 3、63 番 1、65 番、
 66 番、67 番、68 番、69 番、70 番、71 番 1、71 番 2、72 番、73 番、
 74 番 1、74 番 2、76 番、78 番、79 番

上の地域に介在する道路敷を含む。

2 (1) 指定理由

ア 基準 特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準（昭和 26 年文化財保護委員会告示第 2 号）史跡の一部による。

イ 説明 水田稲作を受け入れた弥生時代初期の朝鮮系墓制である支石墓を主体とする墓地遺跡。埋葬人骨には低顔・低身長という縄文人的特徴が認められ、文化の受容の様相を示すとともに、磨製石鏃が刺さった男性人骨が発見され、弥生時代初期から戦闘があったことを示している。弥生文化の成立状況とその時期の社会などを知る上で、きわめて重要な遺跡である。

(2) 官報告示 平成 12 年 9 月 6 日付け

文部省告示第 143 号

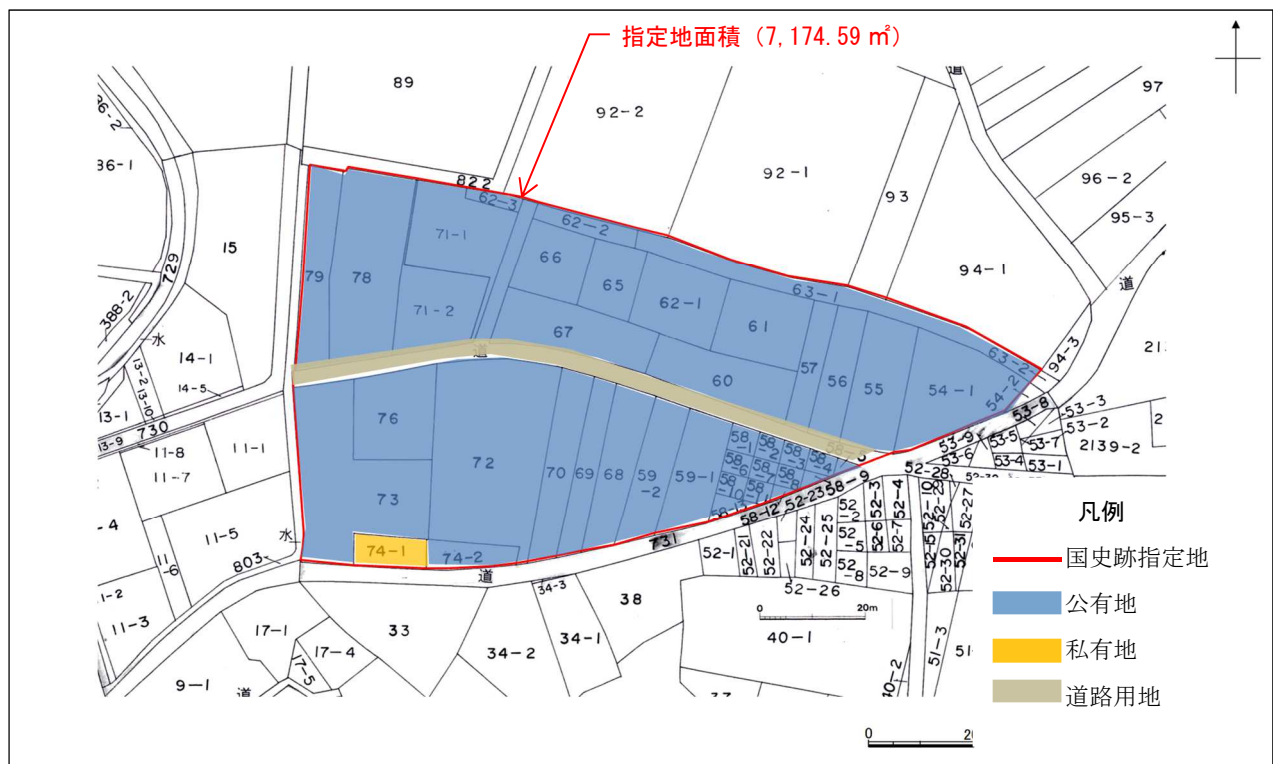


図 2-16 指定地

(3) 説明文

以下に、『月刊文化財 平成12年7月号』（文化庁文化財保護部監修）の指定説明を原文まま記載する。

新町支石墓群

福岡県糸島郡志摩町大字新町字ギ丁原

新町支石墓群は、玄界灘に面した糸島半島の南西側に位置し、引津湾に面した砂丘上に立地する。九州大学医学部教授の中山平次郎によって、大正時代から学界に紹介された著名な遺跡である。付近には縄文時代後期の貝塚、「貨泉」や「半両銭」が採集された弥生時代の御床松原遺跡、古墳時代前期の箱式石棺墓群、中世の土坑墓群などが残されている。

昭和六十一年に本格的な第一次発掘調査が実施され、弥生時代早期から前期前半の支石墓などによる墓域が確認された。以後数次にわたって範囲確認調査が実施され、東側に前期前半から後半への墓域が広がり、南側の砂丘裾には甕棺墓や箱式石棺墓群がのびる南北約八〇メートル、東西約一四〇メートルの墓域が確認された。町指定地として覆屋展示されている第一次調査地区を含む、この地域を今回、史跡として保存する。

第一次調査では、合計五七基の支石墓・甕棺墓が確認され、上石が原位置を保つ支石墓七基、上石を欠き支石のみのもの一〇基などが発見され、全五七基のうち約三分の一は支石墓であった。完全な形の支石墓のうち、ほぼ同様な構造と大きさをもつ九号と一一号の二基を完掘した。九号墓は約一トンの花崗岩の上石を四つの支石で支え、墓坑は長さ一八〇センチメートル、幅六五センチメートル、深さ六〇センチメートルの長方形で、やや横向きの膝を曲げた状態で人骨一体が発見された。この埋葬姿勢や土坑底の四方に棺台と思われる置き石がある例からみても、遺骸の埋葬には木棺が用いられていたと考えられる。約半数の墓を内部まで発掘したが、半数に小壺が副葬されていた。また、合計一四体の人骨が出土したが、乳幼児は甕棺に埋葬され、成人は木棺に埋葬されていたと推定される。人骨は、低顔・低身長という縄文人的な特徴を示し、縄文的な抜歯が共通して認められた。さらに二四号墓からは、木棺の裏込めと思われる四個の石に挟まれるようにして、左大腿骨に朝鮮系柳葉形磨製石鏃が刺さった熟年の男性人骨が発見された。

本遺跡は朝鮮系の墓制である支石墓を多く含む弥生文化初期の墓制をよく示し、埋葬人骨もよく保存された希有な遺跡である。本格的な農耕文化の受容・発信地であったこの地域の人骨が縄文人的特徴を強く残した人びとであったこと、弥生時代の初期から戦闘が行われていたらしいことを示すなど、九州地方北部における弥生時代初期の文化の成立過程や当時の社会状況を知るうえで極めて重要である。よって史跡に指定し保護を図るものである。



写真 2-33 新町支石墓群 24号墓 人骨出土状況

第3節 新町支石墓群周辺の環境

(1) 新町支石墓群付近の歴史的環境

新町支石墓群がある引津湾周辺には古い遺跡が集中する。

縄文時代の遺跡では、芥屋の天神山貝塚がある。主体は縄文時代後期だが、縄文時代前期の土器も出土している。同時代の遺跡としては、岐志元村貝塚（後期）、新町遺跡（後期）があり、新町遺跡の縄文貝塚からは埋葬人骨が検出されている。

弥生時代の遺跡は外来系遺物を含む遺跡が多くなる。新町支石墓群に隣接する御床松原遺跡は最も名を知られている遺跡のひとつで、ここから出土した貨泉は、弥生時代の実年代を推定するうえで貴重な資料である。また、発掘調査により多数の住居跡、漁撈具、楽浪系土器が出土し、弥生時代中期から古墳時代にかけて大陸交易に従事した集落として目をひく。

弥生時代の志摩地区は平野単位でまとまった集団があり、地形によってその経済基盤は農耕ではなく、深く入り込む内湾と玄界灘を利用した交易に求めていることが推測される。

また、この時期の遺跡は伊都国とも無関係ではなく、その形成過程や存続時期において伊都国の影響下にあったと考えられる。

律令期に入ると、砂鉄や森林に恵まれた志摩地区は大宰府の影響下に入り、鉄や塩等の一大生産拠点となる。製鉄に関連する遺跡としては、引津湾周辺で、八熊製鉄遺跡、千町田遺跡等が確認され、福岡市西区にも同時期の大規模な製鉄遺跡が点在する。逆に市内の他の地域からはこの時期の製鉄遺跡は確認されておらず、鉄生産が志摩地区特有のものであったことを物語る。御床周辺は一時期観世音寺の寺領となっており、現在も御床西林寺の木造阿弥陀如来坐像（平安時代）の前に巨大な床鉄が存在する。仏像の下に敷くものとして伝えられるが、これが古代の鉄生産と何らかの関わりがある可能性は否定できない。



写真 2-34 八熊製鉄遺跡全景

また、古代においては製塩も行われていたようである。『観世音寺資財帳』によると大宝3(703)年、志麻郡加夜郷に焼塩山が設置されており、その後、承和8(841)年の「塩釜例文」によると志麻郡司が観世音寺から製塩釜を借りて、製塩をおこなったことが読み取れる。このような記述から志摩地区は製塩地帯であったと考えられる。

万葉集にも引津で詠まれた歌が9首収録されている。「草枕 旅を苦しみ 恋ひ居れば 可也の山辺に さ雄鹿鳴くも」等、うち7首は遣新羅使が詠んだものである。引津亭の位置は確定できていないが、「梓弓 引津の辺なる なりのその花 摘むまでに 逢はざらめやも なりのその花」や前出の歌のように、引津湾あるいはそこから望む可也山を題材にしたものが多く、この内湾のいずれかにあったことは確かであろう。

中世以降、江戸時代までの遺構の確認は少ない。16世紀末から行われた干拓は嘉永年間まで続き、加布里湾の様相を一変させている。寺山の干拓に関しては、「嘉永五年寺山干拓潮止図」が残存しており、当時の様子を知ることができる。

新町支石墓群周辺は糸島市のみならず日本の歴史を語るうえで重要な位置を占めており、弥生文化の始まりという画期において、それを代表する遺跡ともいえる。

(2) 新町支石墓群の概要

新町支石墓群が最初に名を知られたのは大正時代で、九州大学医学部教授中山平次郎博士により学会に紹介されてからである。隣接して半両銭、貨泉の出土で有名な御床松原遺跡があり、ここもまた大正時代に中山が採取した貨泉により弥生時代に実年代を与えたことで有名である。

新町支石墓群に本格的な調査が入ったのは昭和 61 (1986) 年からで、現在の史跡用地内と周辺を含め合計 10 回の発掘調査が行われている。主な成果としては弥生時代早期から古墳時代前期までの墳墓群、縄文時代後期の貝塚、中世の土壇墓など、いずれも貴重な資料が出土している。

特に第 1 次、第 2 次調査では弥生時代早期、前期を主体とした支石墓を含む墓域が明らかにされ、加えて全国に類を見ない弥生時代早期人骨の出土が話題となった。

第 1 次調査は昭和 61 年度に個人住宅建築に伴って 2 箇所で行われ、57 基におよぶ弥生時代早期、前期前半の墳墓が確認されている。うち、上石が原位置を保つ支石墓 7 基、移動された上石 3 個、上石を失い支石のみ残ったものが 10 基ほど確認され、墳墓の 3 分の 1 以上が支石墓であったと考えられている。検出された 57 基の遺構のうち、主体部まで発掘したのは約半数で、残りは現状保存の措置をとっている。これらの墓からは合計 14 体の人骨が出土した。いずれも成人は木棺、乳幼児は甕棺に埋葬されていること、人骨は低顔、低身長で風習的抜歯痕が認められ、縄文人的特徴を持っていることなどが共通する。

このうち特筆すべきは 24 号墓で、弥生時代早期の副葬小壺を持つこの墓からは、成人男性の人骨が出土した。左大腿骨付け根に柳葉形磨製石鏃が突き刺さっており、被葬者は戦闘により死亡した可能性が高い。また、被葬者の足元には小さな土壇があり、中からは別個体の歯等が検出された。歯の様子から少年のものとみられ、別人の首を納めたと考えるのが妥当といえる。この時期の人骨出土例としては初で、しかも戦闘による死亡が確定できる例は皆無である。

第 2 次調査は昭和 62 (1987) 年度に前調査の成果である弥生時代早・前期の墓域の広がりを確認する目的で行われた。13 箇所の試掘調査の結果、弥生時代早期の墓域の範囲が判明し、この東側に弥生時代前期前半および後半の墓域が伸びていることがわかった。さらに弥生時代前期後半の墓域の東側には弥生時代中期の甕棺墓が存在し、御床松原遺跡南側の弥生時代中期後半の甕棺墓へとつながることが想定され、ここ引津湾沿岸における弥生時代早期から中期後半までの墓域の変遷がつかめることとなった。



写真 2-35 新町支石墓群第 1 次調査地点全景

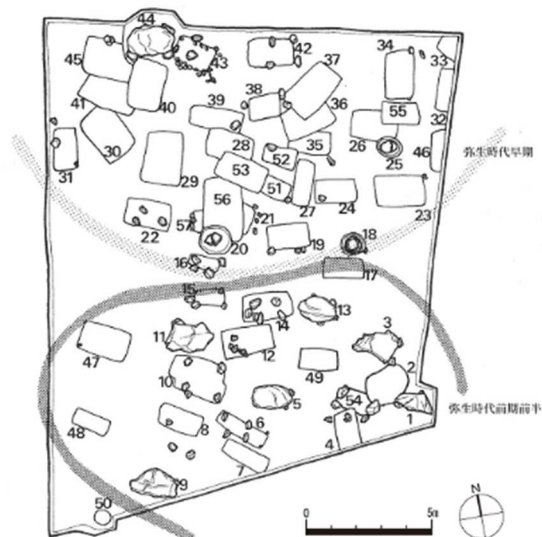


図 2-17 新町支石墓群第 1 次調査第 1 地点墓域復図

第3次調査は平成元（1989）年度に個人住宅建設に伴って行われ、支石墓群の南側に調査区を設定し、古墳時代前期の箱式石棺墓群および甕棺墓群を検出している。遺構の検出高は弥生時代の墓域よりも1mほど低く、旧砂丘の裾に立地していることがわかった。

第4次調査は平成2（1990）年度に新町支石墓群の墓域に対応する生活跡の検出と御床松原遺跡の西限を確認する目的で現史跡用地の北東側約150mの畑地で行われた。3箇所の調査の結果、中世人骨が残存する土壇墓、縄文時代後期初頭の貝塚や土壇群などが確認された。

第5次調査は平成3（1991）年度に前調査で貝塚が確認された調査区を拡張し行われた。調査の結果、貝塚からは貝殻に混じり縄文土器や獣骨、鯨骨、糞石などが出土し、土壇墓からは両腕に貝輪を装着した女性人骨が出土した。



写真 2-36 新町支石墓群第3次調査の様子

第6次調査は平成4（1992）年度に弥生時代早期の墓群の広がりを確認する目的で行われた。第1次調査地点に接して1箇所と新町支石墓群と御床松原遺跡の接点や弥生時代早期の住居跡等を確認するために周囲3箇所の合計4箇所で調査が行われた。1次調査に接した調査区では、支石墓群と一連の墓群に含まれる58号墓が確認され、人骨が出土している。

「平成11（1999）年度新町遺跡史跡範囲内容確認調査」は新町支石墓群の国指定申請に伴い範囲確認を目的として第1次調査地点の西側で2箇所の調査が行われた。調査の結果、陶質土器片が出土したものの遺構は確認されなかった。なお、この調査だけ例外的に調査次数が振られていない。

第7次調査は平成17（2005）年度に史跡地の北側における水田遺構の有無についての確認を目的として3箇所の調査が行われた。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

第8次調査は平成19（2007）年度に圃場整備事業に伴い史跡地の北側で行われた。弥生時代中～後期の遺物包含層を確認したが、遺構は検出されていない。

第9次調査は平成20（2008）年度に県道バイパス工事に伴い、第4・5次調査区と御床松原遺跡第1次調査区に隣接して行われた。調査の結果、縄文時代中～晩期の土壇墓やピットなどの遺構、ヒスイ製垂玉や縄文土器などの遺物が出土した。また、弥生時代中期の甕棺墓、古墳時代の滑石製玉類なども出土している。

これまでの一連の調査により、縄文時代～中世までの地形は現在と異なり、起伏に富んでいたことがわかり、また、史跡地周辺の遺構の分布状況等も明らかとなってきた。

新町支石墓群をはじめ、玄界灘沿岸には稲作開始期の遺跡が点在し、これと支石墓の分布も重複する。そのため西北九州が本格的な農耕文化の受容地であり、列島各地に対する発信地でもあった可能性は高い。ただ大方の予想に反して、新町支石墓群から出土した人骨は、この新文化の担い手が当初想定された渡来人的特徴を持たず、縄文人的特徴を色濃く残していたため、弥生文化開始期の人々の問題に一石を投じることとなった。また、稲作を始めてからそう時間が経っていないころに、既に戦闘行為があったことが24号墓の例で判明した。

この新町支石墓群は砂丘上の遺跡ということで、甕棺や供献土器等の遺物の保存状態が非常によいことも特徴として挙げられる。



図 2-18 新町・御床松原遺跡周辺の遺構分布図(1/2000)

※ローマ数字は調査回数

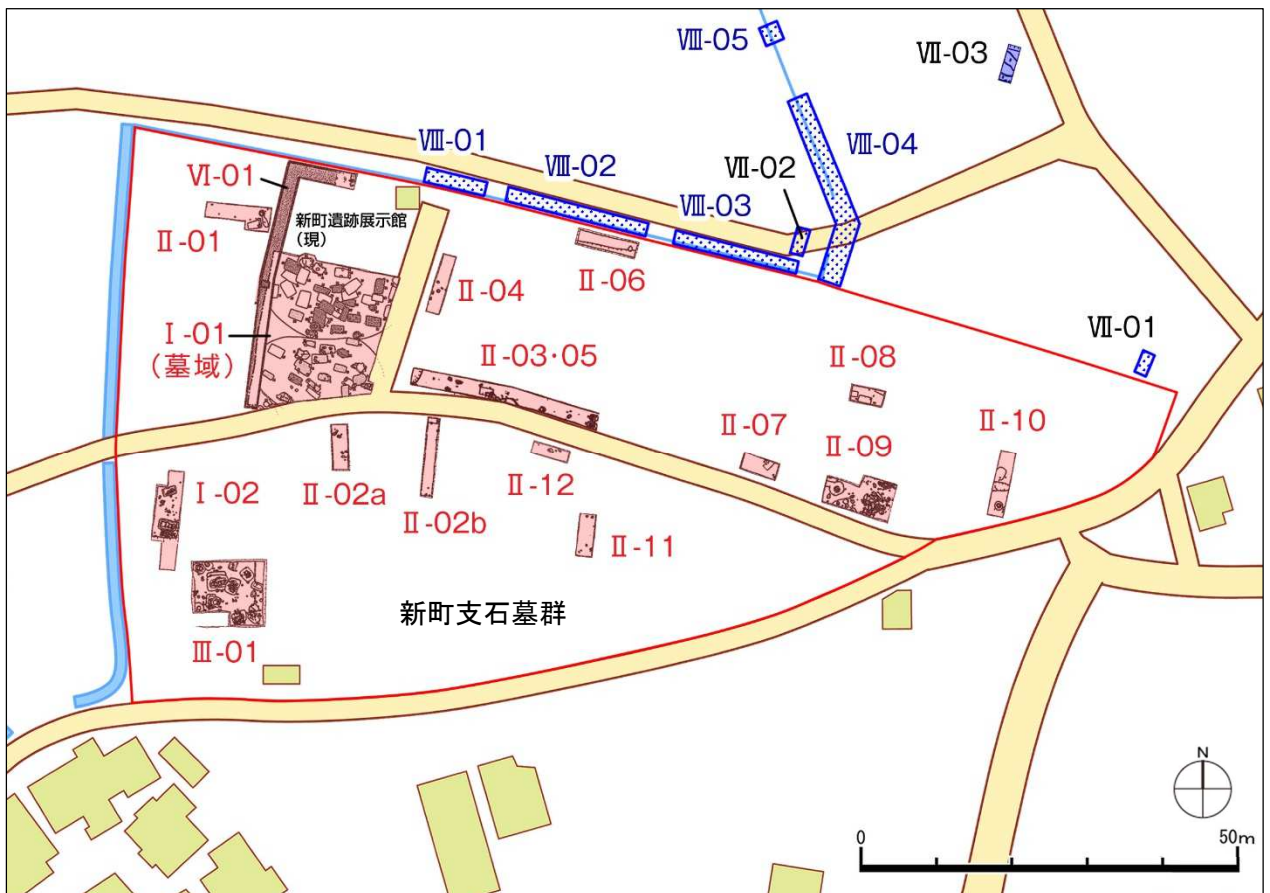


図 2-19 新町支石墓群の拡大図(1/1000)

※ローマ数字は調査回数

(3) 玄界灘沿岸の支石墓

支石墓が稲作文化とともに朝鮮半島から伝来したことは動かしようのない事実であり、それはごく限られた時期に西北九州のみに分布する。糸島半島沿岸に新町支石墓群を含む支石墓の分布をはじめ、佐賀県の唐津地域、脊振山系の南麓および長崎県の平戸・松浦周辺と島原半島に点々と弥生時代早期から前期前半までの支石墓が存在する。佐賀県葉山尻支石墓群(唐津地域)や久保泉丸山遺跡(脊振山系南麓)、長崎県原山支石墓群(島原半島)等によく知られている。これらの遺跡の分布は、縄文時代後・晩期の甕棺埋葬あるいは火葬墓の手法を使用する地域との重複も指摘されていて、縄文時代の伝統を踏襲した新墓制の導入の様子がうかがえる。

ところが、稲作が急速に列島内に拡大することと反して、支石墓の範囲は上記より広がる様子は見えない。以降、大形甕棺、木棺墓が成立・普及すると同時に支石墓は途絶えてしまう。支石墓は稲作受容期の、西北九州人のみに受け入れられるが、他地域はそれをよしとしなかったようである。この背景には縄文時代より朝鮮半島との交流を持続していた西北九州人に、支石墓を採用するにあたって違和感を感じなかっただけの土壌が既に出来上がっていたことがあるものと思われる。

さて、糸島半島の支石墓を詳しく見てみると、時期、地下構造等、未確認のものも含めると、14箇所、86基にのぼる。新町支石墓群をはじめ、曲り田遺跡、石崎矢風遺跡、長野宮ノ前遺跡、三雲加賀石支石墓、志登支石墓群、井田用会支石墓(糸島市)、小田支石墓(福岡市)などがある。長野宮ノ前遺跡の12号墓からは、遺体の胸部と思われる箇所から磨製石鏃が出土し、新町支石墓群24号墓の1号人骨同様、体内に撃ち込まれたものと見られている。曲り田遺跡の支石墓には、小壺が供献されており、弥生時代早期の墓制として新町支石墓群との共通点を見いだせる。また、石崎矢風遺跡の支石墓からは、木棺が検出されており、埋葬棺としての木棺の存在が明らかとなった。

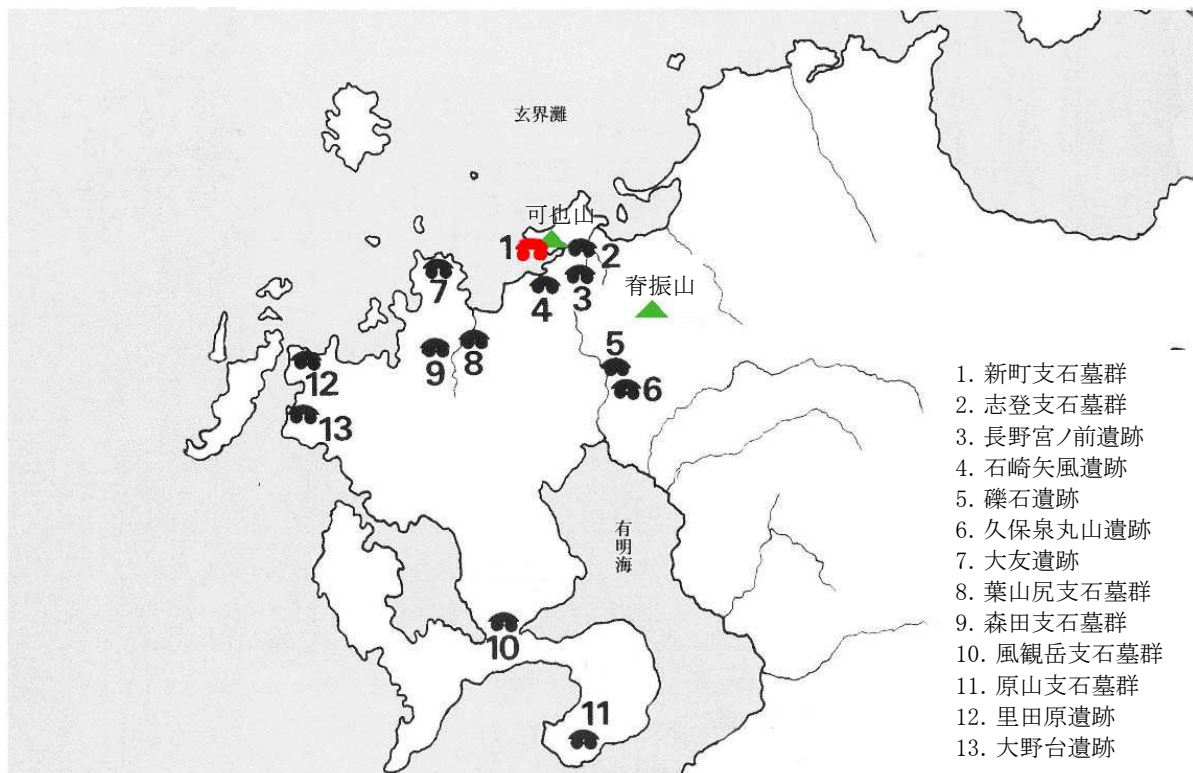


図 2-20 西北九州の主な支石墓の分布図